

「わたし」の性 佐佐木定綱

短歌研究新人賞「さなぎの議題」（遠野真）を読んだ。良い、と思う反面、読後になんだかあつさりとしているような気がした。良い歌も、うまい歌も、不思議な歌もあり、満足したのだが、歌われている「わたし」との距離感のようなものを感じたのだ。

この感覚はなんなんだろうかと疑問を抱えたまま講評を読んでいる（ああそうか）と気づいた。

「さなぎの議題」は「子供から大人になろうとする時期の感覚が痛みと瑞々しさ、そして生々しさを伴って描かれている。」（穂村弘）また「肉親との軋轢、自殺願望、孤独といった重いテーマが被害者意識を過剰に先立てることなく詠まれていて、静かな覚悟を感じさせる。」（栗木京子）講評の言葉を引いたが、その通りであると思う。

だが、講評を読んで驚いたのは、これらの連作は女性の視点で描かれているという指摘だった。確かに言われてみれば女性の歌だ。わたしはつきり男性の歌だと思つて読んでいた。

連作を読む前に受賞者の顔写真を見ていたのだ。連作の前に受賞のことが載っているのだから、まあ、仕方がない。写真はどう見ても男性である。作中主体は作者とは限らないとわかつていゝるはずが、先入観とは恐ろしいもので、最初から最後まで男性のものとして読んでいた。変だな、と思う歌もあつたが、視点を変

えて読んでいるのかと思つていた。

- ・夜のこと何も知らない でこぼこの月からだを大人にされる
- ・秋は来るだけ短いスカートの多弁を聞き流す登校日
- ・痣のないお腹を隠すキャミソール 罪を脱ぐのもまた罪であり性を扱った歌を引いた。一首目、「でこぼこの月」を女性の比喩だとし、女性に犯される男性として読んだ。二首目、短いスカート

の女生徒と共にいて話を聞き流している。大人にされてしまった「わたし」は短いスカートの女生徒の多弁に何も感じない。三首目、キャミソールを脱いで痣のないお腹を見せる女性を見ている。

「わたし」を男性だとして読んでいたので、女性の歌は全て男性である。「わたし」が見ている女性の歌として読んでいた。ここに読後の違和感を感じたのだろう。講評で穂村弘は「連作として読み進めながら浮かんできた「わたし」像は女性でした。性別が二択でもなく異性愛とも限らないといつつ、男女間で非対称という感覚は厳然としてあるから、性のモチーフに触れる歌は「わたし」像によって捉え方が変化しそうです。」と述べている。男性性として読んだことにより歌の魅力が減じたとは思わない。中性的な、ドライな性の見方をしているように感じた。

性が前面に出てくる歌は、作中主体の性、相手の性、読者の性、それぞれで印象が大きく変わってくる。歌を読むときも作る時も、気に留めておきたいと思つた。

個人的にはLGBT（女性同性愛者、男性同性愛者、両性愛者、性同一性障害）の歌が多く詠まれるとおもしろいのではないかと思つている。